

『釣女』

昭和十一年十月四ツ橋文楽座で初演。振付は、モダンな才人として知られた榎茂都陸平。初演の筋書には名前が挙がっていないが、作曲は鶴沢道八。初演の口上には「常磐津の釣女を浄曲の裡に取入れ、新鮮味豊かに錦繡の秋と美を競ふ」とあり、狂言「釣針」をもとにした常磐津の「釣女」（明治十六年十二月初演。作詞は河竹黙阿弥）が直接の典拠として想定されている。この常磐津が、歌舞伎舞踊「戎詣恋釣針」として初演されたのは明治三十四年七月東京座。舞台となる「えべっさん」の愛称で知られる西宮神社は、西宮の鳴尾浜（詞章の中に「遠く鳴尾の沖の石」とあります）で蛭子神のご神像を引き上げた漁師が、ご神託によって少し西の方に宮居を建てたのが由緒と伝えられる。人形技を生業とする傀儡師が周辺に定住していたことでも知られ、神社の北には「傀儡師故跡／人形操り発祥の地」の石碑が建っている。

「かやうに候者は」から狂言がかりの詞で、筋書は狂言の通り、西宮戎に参詣して妻を授かるという展開。大名には美女（首は「娘」）、太郎冠者にはそうでない女性（首は「お福」）を授かって、太郎冠者が悔しがらる。昭和三十七年の文楽アメリカ公演にこれを持っていったところ、お福の方がキュートで魅力的ではないかと異見が現地では出た、という話を当時をご存知のみなさんがよくなされる。

（児玉竜一）